2025 年 6 月 15 日　三位一体主日　ヨハネ 16:12—15「一体となる」

日本ルーテル教団関東地区　北川逸英

先週は聖霊降臨祭でした。皆さんの教会では、どのようにしてペンテコステをお祝いしたのでしょう。私は今年の聖霊降臨祭は、福島いずみ教会の皆さまとご一緒しました。持ち寄りの御馳走には、福島教会の墓地に生えている筍を使った煮物もあって、郷土色豊かな素晴らしい祝会でした。

若鶏の卵という物もはじめて戴きました。教会に出入りの業者さんが新鮮な卵を籠に入れて持って来てくださったのです。私は紙コップに入った卵を割り、箸でかき混ぜて鶏の唐揚げや酢豚をつけて食べました。はじめての経験したが、とても美味しかったです。

「牧師さんはいつもそうやって食べるのですか」と教会の方に聞かれて

「いや、はじめてです」と私はお答えしました。そして私もお訊ねしてみました。

「こちらの教会の祝会には、いつも生卵がでるのですか」

すると福島教会の人たちは口を揃えて答えられました。

「いや、はじめてですよ」「ゆで卵はあるけれどね」

私は楽しくなり大笑いしてしまいました。私たちは本当にお互いを知りません。するとちょっとした違いにも、戸惑い驚きます。すると何でも相

手を不思議な「他者」にしようとしまいがちです。

戦争の時には特にこの動きが、とても強くなります。「挙国一致」が叫ばれ、「非国民」という言葉が一番強い裁きの言葉となります。あまりにひどい最低の時代です。しかしほんの 80 年前までこんなに歪んだ考え方が、日本中あらゆる場所で強く力を奮っていました。

そして今その亡霊たちが世界中で、息を吹き返しつつあります。これは絶望的な事態です。「自分たちがよければ、それでいいんだ」「よそのやつらは関係ない」「まず自分たちの安全と利益を最優先」果たしてこれが神の平和でしょうか。

私たちはみんな、ひとりひとりが違う存在です。それだからこそそこに「人間の尊厳」があります。神さまは私たちひとりひとりを「かけがいのない特別な人間」としてお創りくださいました。

私たちはだれにも強制される事無く、神さまから与えて戴いた、この命を守る仕事を与えられました。それを私たちに教えてくださるのが、聖霊である「真理の霊」です。

今日の第 2 日課、ローマの信徒への手紙 5 章 1 節に使徒パウロは「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、」
とローマの教会に向けて語ります。私たちのルターはこの「義」に、彼の人生を賭けました。

ルターは 1505 年 7 月 2 日シュトッテンハイムで落雷に出会い、同年

7 月 17 日にエルフルトのアウグスティヌス修道会に入ります。1507 年にエルフルト大聖堂で司祭となり、1512 年神学博士としてビッテンベルグで聖書教授となります。

1513 年 8 月 16 日から詩編講義を行い、そこからまさにルターは立て続けに、1515 年春から 1516 年 9 月 7 日までローマ書講義。1516 年 10 月 17 日から、1517 年 3 月 13 日までガラテヤ書講義。1517 年 4 月 21 日から、1518 年 3 月 26 日までヘブライ書講義。そしていよいよ同年 10 月 31 日に『贖宥の効力について』の 95 個条の提題を世に問います。

ルター神学の核心と言われるこの「信仰義認」については、私たちのルター研究所所長、江口再起先生が本年 6 月 10 日出版された『ルター入門ー生涯と思想』6 章「恵みの神学ールターの神学思想」p80-p92 に大変分かりやすく書かれてあります。

またこの本には「付論」というおまけが付いています。p186 からの［付論 1］「恩寵義認」ールター神学の核心は、とても読み応えがあり、ルターの教会に集まる私たちに、江口先生から贈って戴いた大切な宝です。

＜つまり端的に言えば、救済（義認）とは、神による無償無条件の一方的な人への贈り物（プレゼント）なのであり、神の贈与そのものなのである。＞付論 1.三　恵みのみ(sola gratia)1 神の贈与性 p194 より抜粋

ルターの事となると私はつい熱くなり、語り過ぎてしまいます。今日は三位一体主日でした。けれどこの「神さまからの贈り物」という言葉こそが聖霊さまの本質です。まさに聖霊降臨の出来事は、イエスさまの愛によって、地上に残された使徒たちに天から与えられました。そしてそのイエスさまご自身も、天におられる神さまの愛によって、私たちの救いのため、地上にお生まれになりました。

神とイエス・キリストと聖霊、尊い三つを愛が一つに繋ぎます。これを三位一体と教会は呼びます。混ざり合ってまったく同じものになるのではありません。それぞれが愛をもって独立しながらも、同じ働きを行うのです。

牧師は結婚式で二人が誓いを交わす前、勧めの言葉を掛けます。
「人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である」
まことに一体となるためには、愛が不可欠です。力によって相手の尊厳を奪い取り、暴力で併合する事は、全く許されない侵略です。
けれど今世界では、互いの存在を認めず、暴力に訴えて相手を殲滅しようとする戦争が続いています。

三位一体主日の今日、私たちは互いの違いを認め合って、愛をもって生きることが出来るように、平和の主に祈りましょう。